季刊

直江の津

◉かみえちごを考える◉

通巻30号

夏号

2008

6,7,8月

シリーズ 上越（かみえちご）後のかたち 「上越学」への試み

苦悩する港
近代直江津港の変転

小木～航路 活用編
船がたがいの想いをつなぐ

巻頭エッセイ◉このまちのこと

山も川も海もある。
ほどよい町もある。

松本恵子

思い出の黒井村（上）

【文学の旅】

◉「越後記」の旅

【ジャーナリスト】

杉村楚人冠（そじんかん）

季刊 直江の津 第30号 夏号
2008—6・7・8

目　　次

■巻頭エッセイ・このまちのこと
山も川も海もある。ほどよい町もある。
はぎはらさとこ　3

■シリーズ上越後のかたち
苦悩する港　近代直江津港の変転　4

■講演
環境から捉えたバイオマス
余った古古米から〈土に帰る〉プラスチックをつくる
大野　孝　9

■小木から始める佐渡の旅
小木航路　活用編　渡邉恵美　20

■文学の旅
「越後記」の旅　ジャーナリスト杉村楚人冠　18

■「思い出の黒井村」　松本恵子　14

■カメラの眼　25

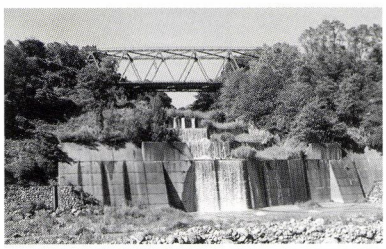
■読書びと
書誌学の回廊　林　望著　24

■建物さんぽ　26

■アルバムの一枚　30

■上越信用金庫 上越産業振興研究所レポート　28

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治11年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



昭和53年5月の白田切川土石流災害から30年。信越線は堰堤から鉄橋へ変わった。

♣巻頭エッセイ
はぎはらさとこさんのこと

1974年　直江津に生まれる。
直江津に育ち、海外を放浪してみたりフェアトレードのお店を開いたり、海岸清掃をしたりしたのち、現在、専業妊婦。

■フェアトレード　Fairtrade　公正取引
発展途上国の原料や製品を継続的に適正価格で購入し、途上国の生産者・労働者の雇用と生活改善、自立を目指す運動。国際フェアトレード連盟（IFAT）は世界70カ国・350団体が加盟して、毎年5月第2土曜日を国際フェアトレードデーとして開催、今年で7回目を迎えた。

山も川も海もある。ほどよい町もある。

はぎはら さとこ

齢を重ねるごとに、贅沢なところに生れ育ったものだと感じる。

「美味しいものは季節のもの」ということに気づいてからは特にそう思う。

春は、フキノトウ、コゴメから始まり、タラの芽、モウソウダケ……。冬に溜まった身体の毒素が綺麗に流されていく気がする。そして、海からはワカメが。軽く湯通しして生姜醤油でいただく。シンプルが一番美味しい。

五月下旬ともなると、父は、知合いの漁師に連れられてイカを山ほど釣ってくる。お刺身はもちろん、セロリと炒めたり、ゲソと肝を酒・塩だけで炒り煮。白いご飯にもお酒にも最高。イカの時期が過ぎれば、こんどは岩牡蠣がやってくる。レモンをきゅーっと絞って、大きな身を一口で頬張る。口いっぱいのミルキーな磯の香り。軽く炙るのもたまらない。秋はキノコ、冬には鴨やイノシシが口に飛び込んでくる。

次に来る季節が楽しみで仕方ないなんて、なんと幸せで贅沢なことよ。

こんな旬の美味しい味を求めて夜の町を彷徨ってみるのだが、考えてみたら家の食卓で食べている。結局、いつも変わらない味の、安心できるお店の扉を開いてしまう。

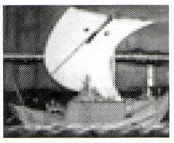
直江津は常連さんが占めるお店が多いと言われるが、お店の主人と客の会話を小耳に挟みながら呑むのも面白いものだ。

そんな店の一つに入ると、決まって「それ食べて早く帰りないや」と、主人に促(うなが)されているおじさん。色々ありそうな人だが、なぜか憎めない。誰もおじさんの陰口を言う人はいない。

直江津の人は「おまん、なにしに来たね?」と、初めはつっけんどんでも、ちょっと事情が分かれば、こんどは「そうかねそうかね、まあ上がりないや」と、大きな懐で受け入れてくれる。

―ざかざかした気質―こんな、さっぱりとした気性なのだ。

昨年、少し離れた町に嫁いでから、いっそう自然の魅力を再確認し、人々の魅力も再確認し、そして知らなかった、直江津の沢山の魅力を再発見している日々だ。



シリーズ
上越後のかたち
「上越学」への試み

苦悩する港
近代直江津港の変転

「中頸城郡直江津港湾出入船舶表」（上越市史・通史・近代編）によると、信越線が全通した明治二十六年の直江津港の出入船舶、蒸気船一二三六艘（九二七四一トン）、和船一〇五艘（一一六三六トン）に対して、郷津湾は蒸気船一二〇艘（九七四〇トン）、和船六八〇艘（一一九〇〇トン）である。二年後の二十八年には、直江津港出入の蒸気船は半減しているが、大型化したのか総トン数は大幅に増え、和船も倍増している。一方で郷津湾は、蒸気船一一五艘とほとんど変わらないが、和船が一千艘と増えている。

これを見ると、和船の世界に蒸気船が進出して間もない時期には、郷津湾が港として十分機能していたことが分かる。後背地の狭さから考えて、艀に積み替えて関川河口に入る中世以来の「泊まり」としての機能も続いていたものと思われるが、郷津湾は、季節によって水深が不安定な関川河口よりも安定して船が出入できる。また、長距離を航海する北前船の「春待ち」の港だったように、想像以上に波浪が少なく、港として活発に船の出入があったと見てよいであろう。

それを裏付けるものとして、郷津湾は「直江津港」として認識され、県・国に修築を請願し、長野市でも商工会議所を含めて、郷津湾期成同盟が発足していることでも分かる。

『環日本海地域社会の変容』（芳井研一・青木書店）の「裏日本の対岸認識」のなかで、明治三十九年の新潟県議会の模様が紹介されている。それによると新潟市選出の鳥居県議は、「郷津が裏日本においてもっとも適当な港湾の位置である。将来亜細亜に向いて発展した場合、浦塩港（ウラジオストク）が日本に対する商業地となり、郷津が浦塩港に対する唯一の港になるであろう」と発言し、阿部知事も「南は台湾澎湖列島より、北は北海道、樺太に至るまで、その中間に位置し満韓諸港及び浦塩に相対する日本海沿岸中唯一の好位置をしめている」という認識を示し、郷津築港は国家事業として行うべきであると発言している。

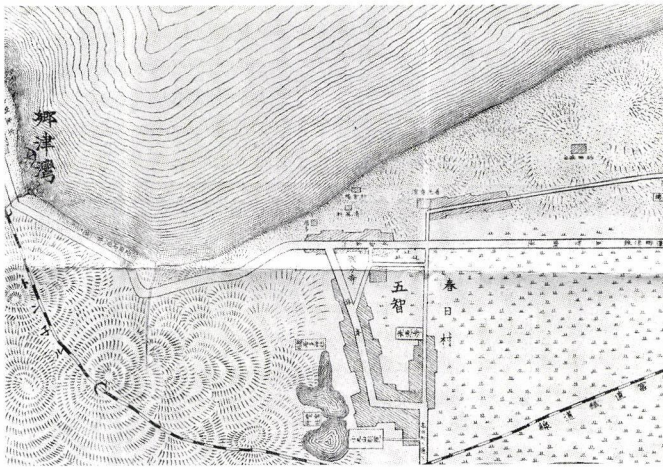


「海港」（直江津港パンフレットより）

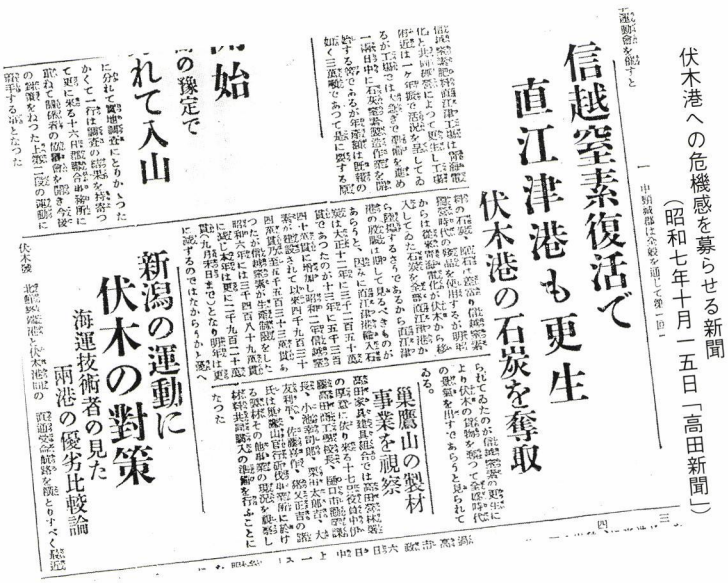
なぜ「直江津港」なのか

「直江津港」がこのように注目されたのは、先の県会発言のような地理的優位性とともに、初めて日本列島を横断する唯一の鉄道、信越本線の基点に図らずも直江津がなったことによる。

そのため「直江津港」は、その港湾機能とは関わりなく、―否応なしに―内陸部や首都圏への物流基地として、また日清・日露戦争



明治時代の直江津案内地図（部分） 郷津湾に港の印、イカリが見える



伏木港への危機感を募らせる新聞
（昭和七年十月一五日「高田新聞」）

信越窒素復活で
直江津港も更生
伏木港の石炭を奪取

新潟の運動に
伏木の對策
海運技術者の見た
兩港の優劣比較論

の勝利によって、大陸進出の窓口という立場を担うことになったのである。

これは直江津に、かつてない未曾有の経済的活況をもたらすことになる。

しかし大正二年、北陸線が全通し信越線を経由して関西と首都圏が直結すると、小矢部川河口の自然の良港である伏木港に、日本海の物流基地の立場をたちまち脅かされることでも分かるように、港湾機能の不備は如何ともしがたいものであった。

北海道の海産物や大陸から入る肥料などは艀で砂浜へ揚げて積み上げることも可能だが、鉄道や関川の豊富な電力を求めて進出してきた化学工場、信州の製糸業などへ供給する大量の石炭を捌くためには、関川河口の港湾機能の充実がどうしても必要であった。



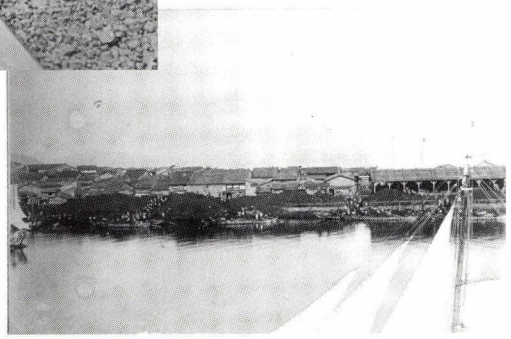
海岸荷役（「上越名勝案内」明治40年）

目の前がすべて港 直江津港の宿命

築港技術が発達した今日では、現在の直江津港に見るような、人工の「海港」も不思議ではないが、技術の未熟な時代、日本海の冬の波浪を避けるには河口港が最適であった。一方で、その宿命として土砂の浚渫を常に行わなければならなかった。

関川の水は、ほとんどを最上流から発電と



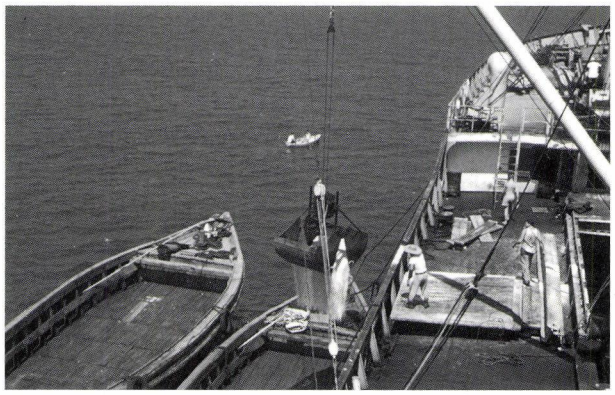


上 「たがら」を背負って石炭を運ぶ“人間ベルトコンベア”と言われた
右 関川左岸の浜線駅に艀に満載した石炭を陸揚げする

灌漑に利用されている。発電所の隧道と農業用水路を通り、河口近くに至ってようやく関川に戻るため、海までの距離が短く急峻な割には土砂を押し出す力が弱い。そのため防波堤の延長や恒常的に浚渫をしても、しばしば河口が塞がれ、関川河口にある「直江津港」は河口港と呼べる状態ではなかった。

そのため大型の船舶は沖合に停泊し、石炭を艀に積み替えて陸揚げするという沖荷役に頼らざるを得なかった（江戸時代の藩米を積む弁財船も二百石以上は沖懸りだった）。この状態は、「河口分離」という大胆な改修によって、現在の直江津港へ一歩を踏み出す昭和三十三年まで続くのである。

三十一年に出された第一港湾建設局の報告書「日本海沿岸に於ける石炭の輸送について」は、直江津港を「本港は典型的な沖荷役港であって、全部艀沖取りをおこなっている。しかし冬期には強風浪のため、この沖荷役さえ不可能となり、十二月から二月までは貨物船の入港は完全に途絶えてしまうのが現状である」と報告し、陸揚げした石炭の貯炭場の異常な面積も指摘している。

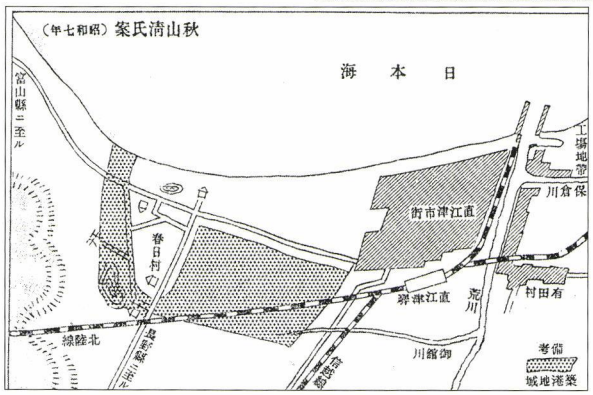


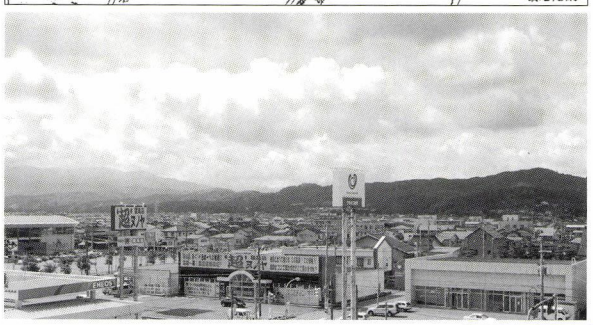


工業用岩塩の沖荷役
昭和30年代

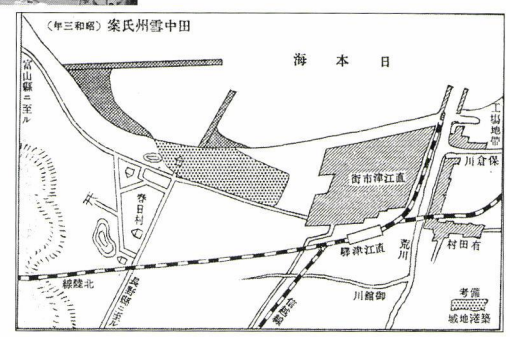
郷津か直江津か

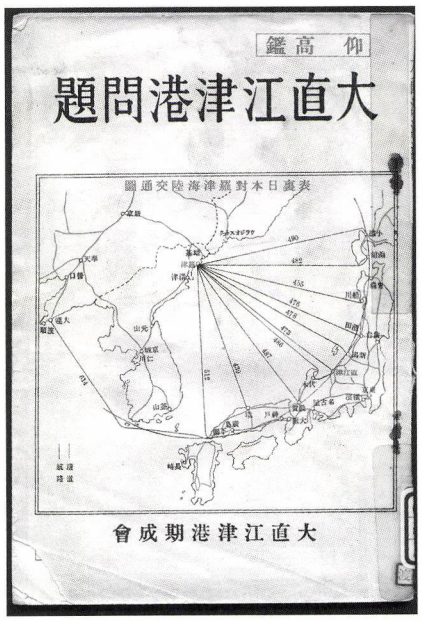
大正元年、直江津港は国指定港になるものの、河口港としては相変わらず欠陥ばかりの港であった。そのために延々と郷津築港案と関川河口案の論争が続くことになるのだが、圧倒的に郷津案が多く、旧高田藩士で帝国通信社を設立した竹村良貞は、大正四年の『高田市史』付録「上越発展策」で、「高田市発展の大々的計画を考えるのであれば『裏日本関門の解放』すなわち郷津湾の築港について声を大にして言わなければならない。この築港こそ高田市発展の唯一の鍵」であると述べ、「地元の人間は何を手をこまねいているの





上　秋山が発表した内陸港の計画図
下　写真の辺りが港になる
右　田中雪舟という人物が考えた郷津湾と善光寺浜掘り込み案

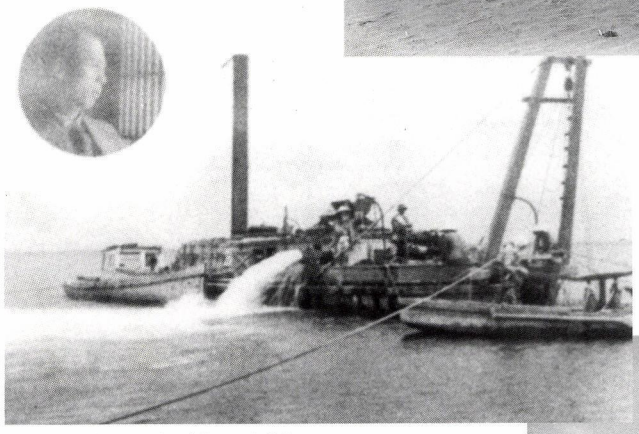




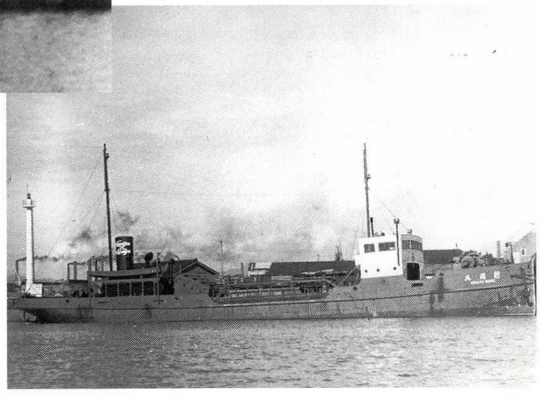
「大直江津港問題」の表紙
羅津港への距離が示されている



港湾技術者の視察の
模様（大正時代）



港の修築工事（大正時代）



河口分離まで活躍した浚渫船
新潟丸

だ」と言わんばかりに書いている。

しかし、郷津案は直江津地区に経済的大打撃を与えるという思惑もあって、築港技術の問題から、政争の具と化していくのである。

そのなかで、首都圏への電力開発の一環として、信濃川を長野県の戸狩から関田山脈を貫いて妙高市水上で発電し、関川へ放流する計画が政府によって立案された。地元は河口の土砂を排出する妙案として、期成同盟会も設立されたが、蒲原平野の水利権もあって大正八年に小地谷案で消滅している。

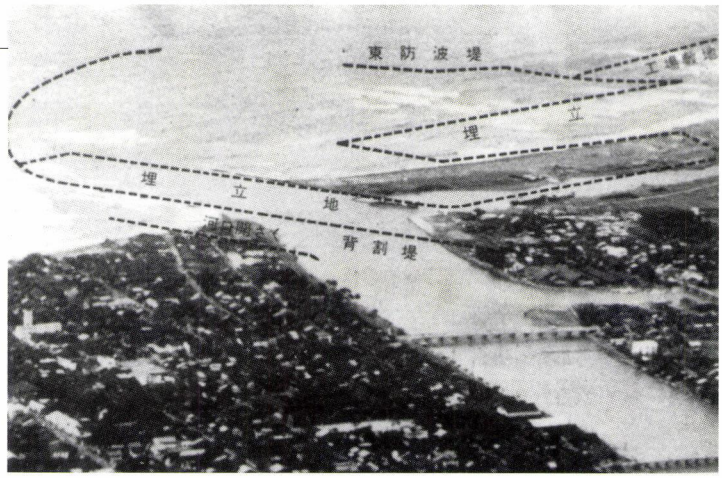
また昭和七年、元満鉄用度課長秋山清が「高田新聞」の六回にわたる「大直江津港の構築に就いて」という論文で、居多海岸から運河を掘り、元北警察署周辺に三千トンクラスの船舶が入れる内陸港の築港を設計図付きで提案している。これを受けて翌八年、当時直江津町議であった吉田修次が、大直江津港期成会の名のもとに『大直江津港問題』という冊子を発行して秋山説を強力に紹介している。

内容は、当時の大陸への膨張政策に沿って、満州国の海の玄関口、羅津港と最短距離にある直江津港の存在をアピールしようとする意図があったようだ。いずれにしても、ほとんど顧みられることなく消えていった。

河口港から海港へ

今までみてきたように、本来、近代的な港湾機能を持つにはあまりにも条件が悪い「直江津港」が、港を維持するために、くすぶり続けてきた築港問題は、三十三年十一月二日の「直江津港河口分離大改修工事起工式」に

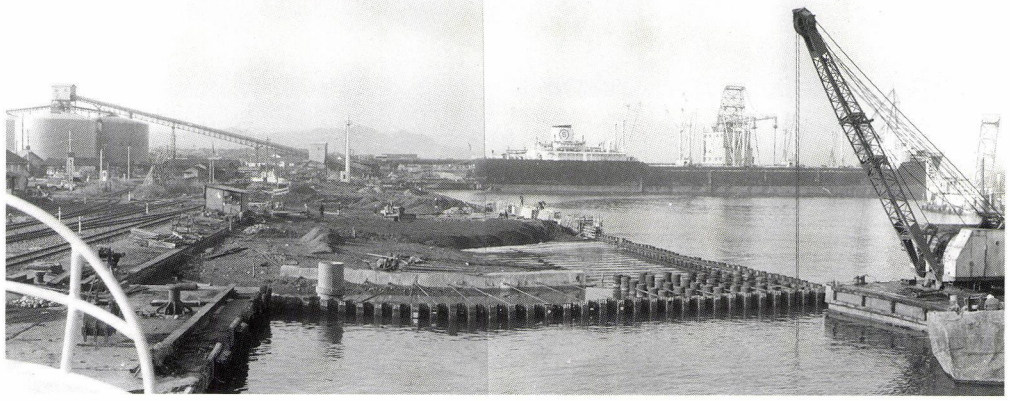
新しい港への船出



河口分離計画図



上　河口分離直後の港内

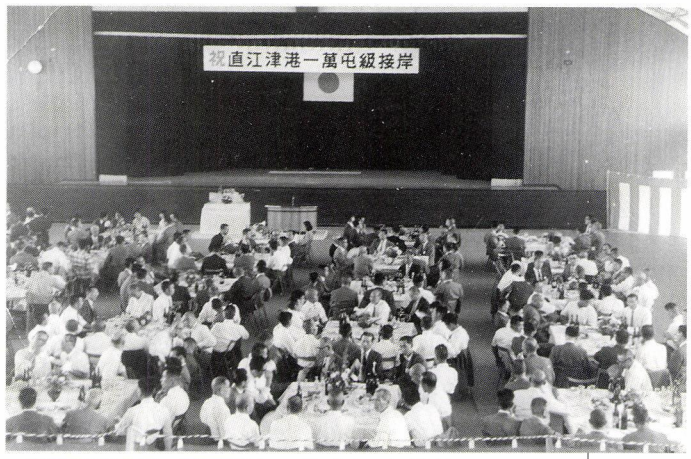


右　ようやく大型船が入港

よって終了する。

そして、当初、通称ドックといわれた部分と分離の背割り提を埠頭にする程度に考えられた港が、今では、佐渡汽船が防波堤の先端を通過し「直江津港入港」のアナウンスがあってから、接岸までに二十分もかかるという想像もつかない人工の「海港」へと「直江津港」は変容した。

港湾機能の想像を超える発展で、関川河口にへばりつくようにしてあった港の機能、あるいは古老が「昔の直江津の港は大変なもんだった」と語る、牧歌的な海岸荷役風景が失われるのは当然である。しかしそれはまた「港まち直江津」は何処（いずこ）、という問いの始まりでもあった。（「直江の津」編集部）



昭和38年6月　英国船ロードバイロン号（13,000ｔ）入港祝賀会

■本稿は上越なおえつ信金倶楽部の総会における講演を抄録したものである

環境から捉えたバイオマス

余った古古米から〈土に帰る〉プラスチックをつくる

アグリフューチャー・じょうえつ㈱　大野　孝

会場の中に懐かしい顔ぶれの方々がいらっしゃるので、少しは気を楽にしてお話をさせていただけるかと思っております。

アグリフューチャー・じょうえつ。変な名前ですが、上越市の指定ゴミ袋を作っています。この袋はお米からできているプラスチックですが、どのようにできるのか、ということからお話して行きたいと思います。私たちが取り組んでいるのは、お米、間伐材、籾殻からバイオマスプラスチック、――生分解性プラスチックなどを作ることです。

なぜ取り組もうと思ったのか…、今から五年前、職にあぶれて何か仕事を始めなければと思いあぐねておりました（上越市副市長を辞任）。そのころ国では、お米を資源として使い、バイオマスの循環型社会を作って戦略的に産業構造を強くし、農村を活性化していこうという「バイオマス・ニッポン総合戦略」を策定していました。

その旗を振っていたのが当時の農林省で、私の同期がそれを考えて、小泉首相の飯島秘書官が非常に興味を持って首相の耳に入るところとなり、始まったという経緯があります。彼は四年近く首相官邸に召し上げられるほど気に入られてしまいました。

話をもとに戻しますが、大量のお米が余っていながら家畜のエサにしか使えないのでは、ますますハケない。そのお米を資源として使えるようにするということです。

用途として「プラスチックであろう」という考え方がすでにありましたが、私が考えたのは、ここは得意といえば得意なんですが、農林省は関係補助事業をイヤと言うほど作るであろう、それを利用すれば事業化してもひょっとしたらやれるかもしれない。ひょっとどころか簡単にやっていけると思って、五年ちょっと前に会社を間違って作ってしまい、久保田建設さん始め地元の企業の方に出資をお願いして立ち上げました。市役所時代の関係で、バイオマスからプラスチックを作るノウハウを持った大学の先生とも知り合い、研究開発を続けてこられたわけです。上越市からも農水省から補助金を取っていただき、製造機械の設備をしてきました。

本当に間抜けで、簡単にできてどんどこ売れて儲かると思っていました。ところがそうは簡単にはいきません。なぜなら大手企業がいろんな形で挑戦していますが、一つも事業として成功していない。そこを知らずに始めたわけですから七転八倒でした。



ご飯を炊いてプラスチックを作る

私たちは「お米から作る」という前提で補助金をもらっております。

穀物、特にデンプンからプラスチックを作るのは、イタリアのノバモント社が生分解性の高いデンプンからフィルム素材を作っていますが、私たちのプラスチックは、お米でご

プロフィール
アグリフューチャー・じょうえつ株式会社代表取締役
一九八三年　東京大学農学部卒業
農林省・国土庁を経て、一九九五年～一九九七年　上越市に農林水産部長として出向。
一九九八年　農林水産省構造改善局課長補佐・東京大学非常勤講師（農業基盤計画論）一九九九年～二〇〇二年　上越市副市長（産業部門）。二〇〇三年アグリフューチャー・じょうえつ株式会社設立。

注

プラスチック
プラスチックとは本来、可塑性を持つものと言う意味で、一般には高分子化学合成された物質で、どんな形にも成型できる物質をいう。
熱を加えると溶け、冷やすと固まる性質を持つ熱可塑性プラスチックと、熱を加えて一度硬くなると再び軟化しない熱硬化性プラスチックがある。

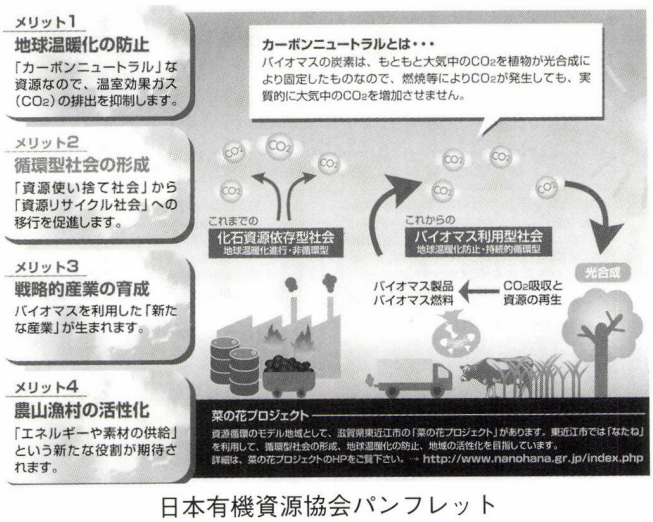
バイオマス　biomass
本来、生態学用語で生物の量を物質の量として表すものであるが、現在は化石資源を除く再生可能な生物由来資源を指し、バイオマスまたはバイオといえば生物由来資源のことをいう。

生分解性プラスチック
従来のプラスチックと同等の機能を有するが、土中や水中の微生物によって、最終的に水および二酸化炭素に分解されるプラチック。バイオマスプラスチックの場合は、この二酸化炭素は自然の植物が持っていたもので、化石資源が発生する二酸化炭素とはちがって、地球上の二酸化炭素の量をふやすことはない。これをカーボンニュートラルという。

バイオマス・ニッポン総合戦略
農水省と関係省庁でバイオマスの利活用推進を図ることを目的に、平成十四年に閣議決定された。平成十八年には京都議定書発効を踏まえて、国産バイオ燃料の導入、バイオマスタウン構築を図るために見直しが行われている。

コンパウンド
プラスチック素材に色素や添加剤を加えて用途に応じたプラスチック材料にした製品。

マスターバッチ
プラスチックと多量の染料・顔料などから構成される高濃度の色素コンパウンド。



日本有機資源協会パンフレット

飯を炊くようにして一気に作る方法です。
　世界の一般的な方法は、一度粉にしてデンプンを抽出し、プラスチックになりやすいようにアセチル化する化学変性処理を経て、樹脂と混ぜるという工程が必要なので高価な物になります。お米の場合、上新粉にしたらそれなりに作れますが、粉にするのでは安くできません。
　まあ、ド素人だからやれたということですが、デンプンを抽出して化学変性処理する工程を「ご飯を炊く」ことでプラスチックになりやすい状態に前処理をしておけばいいだろうと考え、デンプン質つまり「お餅」になるまで処理して一気に樹脂を入れたら、うまくプラスチック状になってくれました。
　コンパウンドなどを作っている化学メーカーが面白いと言って見に来るようになりましたが、ご飯を炊いているような蒸気を見て大変びっくりします。彼らは原料を充分乾燥させますから「自分たちとは正反対なことをしている。常識では考えられない」と言います。
　「お米」だから比較的簡単にできたので、小麦だと今も出口が見えていないと思います。麦は健康に良くても消化が悪いので、麦だけ炊いて食べることは普通しません。粉にしてイーストで発酵させてパンなどにしますが、お米は炊けばすぐに食べられます。この関係はプラスチックにするのと同じで、お米だったから前処理が要らない。非常にラッキーだったわけです。これを「お米の国のプラスチック」だと言っていますが、私たちの国土に一番合ったバイオマス原料として、お米を選んでよかったと思っています。
　価格は汎用樹脂より高くても十から十五パーセントが上限でなければ使えないし、同等の物性でないとダメですが、原油価格の高騰で汎用樹脂は一・五倍近くまで上がって、キロあたり二百円台半ばくらいだと、我々のものは二百円前後ぐらいになっています。

「お米のプラスチック」とは

　お米のプラスチックと我々が呼んでいるものは「お米のマスターバッチ」、あるいは「お米の濃縮物」と言われています。
　これから皆さんにお使いいただくゴミ袋は「お米の濃縮物」（プラスチックマスターバッチ）をそのままでは使っていません。石油樹

汎用樹脂
価格が安く加工もしやすい熱可塑性プラスチックのこと。一般の成型品、包装材料、雑貨、家庭用品などに幅広い用途に使われる。

インフレーション成型
プラスチックをチューブ状に形成する方法。レジ袋やゴミ袋などは、この成型方法がとられている。

ブレイクスルー
科学技術などの飛躍的進歩

ソフトセルロース
稲藁や籾殻などの食糧と競合しないセルロース。（セルロース／植物の繊維質の主成分。天然の植物質の三分の二を占める。繊維、パルプなどの形で利用され、火薬、レーヨン、セルロイドなどの原料にもなる）。

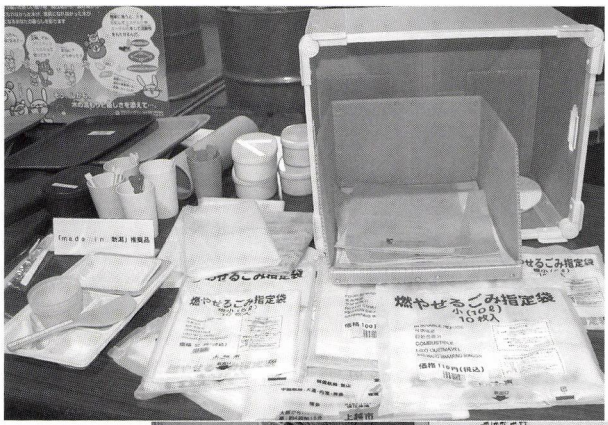
脂を少し混ぜています。この濃縮物は合わせる樹脂でプラスチック成型であれば、射出成型、インフレーション成型、押し出し成型など、用途によって組み合わせが可能で、ほとんどのものに対応することができるようになりました。濃縮物としてのお米の粘り、接着性が他の樹脂と混ぜるときにバインダーとして効いてくるのです。

上越市のごみ袋のような方法は、樹脂屋さんの常識では「混ざるわけがないだろう」と言います。しかし騙されたと思ってやってもらうと、なるほど不思議だねということになる。これもお米の粘りが効いて、色んな樹脂と混ぜて使うことができるのです。これを環境素材ではなく増量剤として使うという見方も出てきています。

環境からとらえたバイオマス

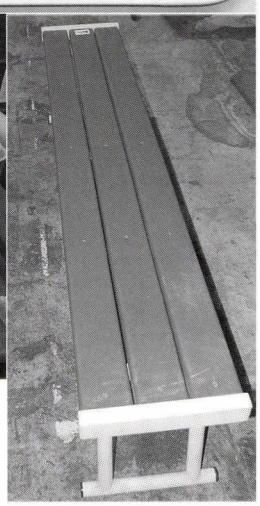
バイオマス植物由来資源を石油の代替として使おうとするとき、トウモロコシなのかサトウキビなのかとよく言われますが、地域で発生し、資源として持続循環して手に入れやすいものでなければなりません。それが「お米」だと思ったわけです。

減反政策で三分の一の水田がお米を作れない状態を強いられています。毎年二百万トンも売れ残っている上に、約八十万トンのお米を輸入しなければなりません。そのため一トンあたり二百億円の低温倉庫の保管費用がかかります。このお米は家畜のエサとして処分されますが、買入れ価格と処分費に差額が発









いろいろな製品への可能性が生まれる

ベンチ

生します。国は、それらに三千億円というお金を使っています。

これだけ苦労して処分するお米を資源に利用したらトウモロコシより高くなるはずがない。間違いなく持続循環的に安く手に入るはずです。上越でもお米を資源農産物として作る取り組みが始まっており、エタノール用の資源米を去年は十ヘクタール、今年は一〇〇ヘクタール作ることになっています。

これからは、いかに有利なバイオマス資源を選択し、かつ有利に調達できるかというシステムを構築しなくてはいけません。この地域では、それはお米が一番だと思います。

籾殻も舗装タイルや断熱ボード用のプラスチックにするところまできていますが、さらに重要になるのは稲藁や雑草です。どのメーカーも稲藁からエタノールを作ろうと必死です。デンプンでは食用との価格競争が発生しますから、ソフトセルロースから簡単にエタノールが作れないかと、国も約六十億円の開発補助金を出しています。

じつは、私たちもできそうな技術を持っています。バイオマスのプラスチック化には、バイオマスを一度溶かして三次元硬化し、耐熱性の高いプラスチック樹脂に変える方法があります。製品としては自動車の灰皿などに使われます。

その「一度溶かした状態」がエタノールと同じような状態なので、ダイレクトに燃料にできると思っています。燃料ですからドロドロしすぎると使えないので、どこまで粘度の低いものができるか、いかに簡単なプロセスで一気に作ってしまうかが課題です。

いくつかブレイクスルーがなければだめだと思っていたのですが、いい感触を得ましたので挑戦しようと思っております。

今の技術水準でバッチ式（一括処理）で普通にやればそれなりのものができ、少なくともエタノールより絶対いいと思っています。エタノールの場合は、アルコール発酵させる工程でバイオマスの半分の炭素骨格が空気中に出ていく、つまり最初から二酸化炭素と水になって出て行ってしまうのです。しかし我々の方法はそのまま溶かして、全部（エタノールと同じような状態の）プラスチックにして出すというような方法です。

これは大風呂敷、話し半分の七掛けくらいの気持ちで挑戦していきたいと思っています。

バイオマスビジネス

バイオマスだから環境問題であるという捉え方では絶対にビジネスに発展できないでしょう。バイオマスであろうと石油からであろうと、同等に使えて同等の価格以下でなければ相手にされません。

ビジネスに変えていくには、「バイオマス資源を地域に循環させることに意味がある」という考え方で、地域もそのような見方をしていてくれる必要があります。

石油確保のためには戦争さえ起きますが、バイオマス資源は自分たちが耕したり採取したりして、地域あるいは国土の中で持続循環して採っていくものですから、それらが自給できる環境を作るのが、行政の仕事として重要だという認識が必要です。

好き勝手に言うのは簡単だけど、できるのかと言われれば、まあできないと思います。しかし社会としてやらなければなりません。

一つの考え方として環境税は、環境を良くするための単なる増税にすぎないと思われ勝ちですし、今以上に石油に税金をかけてバイオマスが利用しやすくするような方法もありますが、それも良くないと思います。

環境税の反対のインセンティブ（刺激）をバイオマスに与えてやる。つまりバイオマス資源に対して付加価値を補助金がわりに付ければいいのだと思います。

京都議定書の発効で、目標の二酸化炭素排出量を削減できなければ排出権を他から買うというマーケット、排出権取引が生まれています。排出権は全くお金と一緒ですから、国が補助金の代わりに排出権というお金をバイオマス資源に付ければ国産バイオマスが使いやすくなります。

バイオマス製品を使うと、排出権が補助金で付いていますから、排出権を自分のものに

経済循環の基点直江津港





講演する大野さん

できます。バイオマス由来のものをどんどん使おうじゃないかということになり、経済合理性が成り立ちますから、無理やり変な増税というようなものはなくなります。

それぞれの地域にとって何がバイオマス資源として重要なのか、持続的に有利に発生して、それがどんどん金儲けに繋がっていくかという環境を育て、合理的な単位で循環させる政策をとることが重要です。

バイオマスと経済循環

これから先、経済循環が一番重要な単位になると思いますが、この地域の経済循環の基点になるのが、直江津の港だと私は信じています。直江津港を基点に物が出ていって逆に戻ってくるという、循環する範囲の地域でお互いに頼っていく。そこを使わなければならない人たち、こっちを向かざるを得ない環境の単位が、経済循環の単位に絶対なって来るはずですし、そうしないと強い地域になれないと思います。

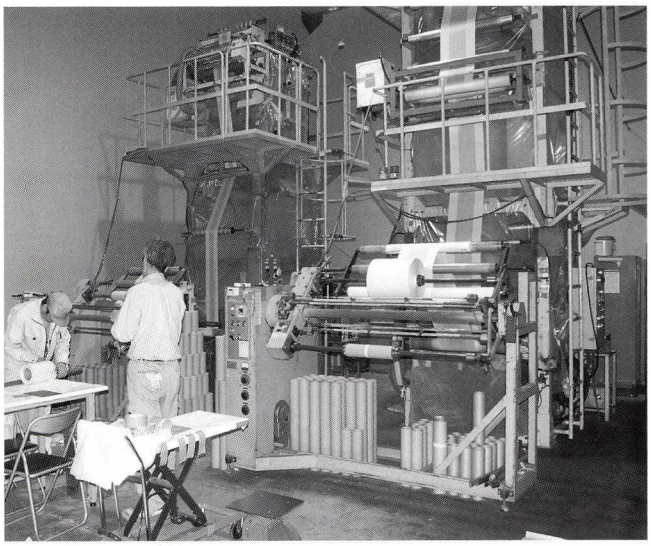
私たちの仕事で言えば、まず直江津港の単位で広がる範囲を集中的にターゲットにしようと考えています。この地域のバイオマス資源からできる製品が、各地で使ってもらえるような政策を打ってもらえれば、かなり合理的になっていくだろうと思います。

上越市がゴミ袋にお米のプラスチックを採用してくれたことは、まさにそのモデルになる取り組みとして旗を振っていただいたわけです。このように自治体が使ってくれたことで、全国から引き合いが来ています。

お隣の富山の一部、長野の一部、そして群馬の一部、それを港の単位の広がりで強い協調体制を作っていけば、良いビジネスに発展していけるだろうと思います。

燃料についても、そのぐらいの単位でできそうな技術を上手く構築していけば、商売につながっていく可能性があると思います。

私たちの取り組みは、あくまでも地域循環のビジネスモデルとして、お米を使ってプラスチックを作っていますが、皆さんからも、自分の商売になりそうだというものを据えていただいて、お力をいただきながら広めていけるのではないかと思います。その単位を直江津の港から考えたいと思います。



インフレーション成型機
上越市のゴミ袋などが生まれる



循環する資源



松本恵子と「思い出の黒井村」

写真若き日の松本恵子
『松本恵子探偵小説選』(論創社刊より)

『あしながおじさん』や『若草物語』が、松本恵子という翻訳家によって美しい日本語に翻訳され、今も彼女訳の愛読者が多いことでも知られている。

松本恵子、旧姓伊藤恵子は明治二十四年、函館で伊藤一隆の次女として生まれた。

父の一隆は札幌農学校でクラークに教えを受け、北海道庁水産課長として鮭鱒の人工孵化場の開設、鱈業の奨励など北海道の水産開発に尽力し、アイヌの救済などを行っている。また、日本で最初にベースボールをやった人でもあり、クラークの影響で内村鑑三などと共に禁酒運動を始めるなど、近代日本の幕開けを生きた人である。

一隆の札幌農学校時代、農業指導者であったエドウィン・ダンが、明治三十三年、インターナショナル石油株式会社直江津製油所を開設するにあたって、彼を総務部長として招き、幼い恵子も伴われてきた。そして「黒井」が松本恵子の思い出の地になったのである。

「思い出の黒井村」は、八千浦村黒井小学校と直江津高等小学校時代の思い出で終っているが、県立高田北城高校卒業生名簿の第六回(高田高等女学校・明治四一年)卒業生の欄に「松本(伊藤)けい」という名前があり、彼女と推定される。

恵子は青山女学院英文専門科を卒業、大正五年、ロンドンに赴任する貿易会社員一家の家庭教師としてイギリスに渡り、三年間滞在する。そこで留学中の作家、松本泰と知り合って結婚し帰国。

夫の松本泰は大正十年に東京東中野に、いわゆる文化住宅を十数棟建てたが、恵子が大仏次郎の縁戚ということもあって、林不忘(佐渡出身・丹下左膳の作者)、小林秀雄、田河水泡などが住人となり、「谷戸(やと)の文化村」と呼ばれるような文化サロンが生まれた。泰はまた出版社を興して探偵雑誌を創刊、自らも探偵小説を発表して日本の探偵小説の基を築いた人である。

恵子もまたアガサ・クリスティーのミステリを翻訳し、日本に紹介したことでも知られ、一方で探偵小説も書き、近年『松本恵子探偵小説選』(論創社)が出版されるなど、女性探偵小説家としてのみならず、夫と共に日本の探偵小説の先駆的役割を果たした人である。昭和五十一年逝去。

「思い出の黒井村」は、郷土史家・故渡辺慶一氏が、古稀を迎えた松本恵子を横浜に訪ね、恩師南條宇太郎と黒井村時代の思い出を綴ってもらい、昭和四十四年に手書きの謄写版(ガリ版)印刷で、B5判の冊子にして配付したものである。

彼女は、「少女倶楽部」の昭和十二年六月号にも、「校長先生と富士山」(教育家感謝宣伝)という題で恩師の思い出と徳を称えている。

なお本稿には、現在では不適切と思われる表現もあるが、時代の雰囲気を損なわないために、そのまま掲載した。また筆写の段階での改行、句読点の誤りと思われるものは訂正し、読みにくい字には振り仮名を付した。転載に際し、松本恵子の著作権継承者・恵みの会の許可を北越出版が得ている。

思い出の黒井村（上）

文　松本恵子
絵　丸山えみ子

テレビで白銀のスロープを雪煙をあげながらスキーで滑走している光景を見ると、私はいつもスキーなどつけないで、あの山肌をころがり落ちていったら、さぞ愉快だろうなと思う。そういう時の私の脳裏には黒井の浜の砂丘が浮かんでいるのである。

私が子供の頃の夏から秋にかけて一番好きな遊び場は、村から波打ちぎわまで行く途中に横たわっていた砂丘であった。私は村の子供たちと一緒になって、苦心して頂上まで登って行っては、身を横たえて下までころがり落ちていく、その愉しさを夢中になって繰り返したものだ。

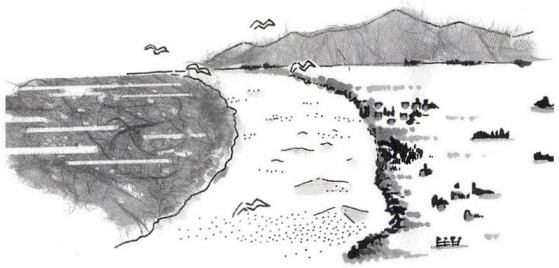
家へ帰ると、ばあやが待ち構えていて、座敷へ上がる前にいきなり私の髪の毛の中へ、ささくれだった手を入れて、指先で頭の地の砂を掻き落とし、それから上がり框（かまち）にござを敷いて着がえをさせる。先ず帯をとくとざっ！　と音をたてて砂が落ちる。着物も肌着までも砂だらけなのだ。その着物を裾の縫いしろの中に砂がめり込んで、ずしりと重くなっているので、ばあやは、

「せつないねえ！」

と嘆きながら、三つ折ぐけの裾をほどいて洗濯し、干しあげると一々裾をくけるので、それが毎日の事だったから、今考えると私はばあやに取って随分厄介な存在だったに違いない。その遊びを別に親に咎められた覚えがないから、この「わるさばかりしなさるあばちゃん」（あの村では男の子の一番上はあんちゃんで、それ以下はおっちゃんと呼ばれ、女の子はあねちゃん以下はあばちゃんであった）の悪事を母にも訴えなかったらしい。笠原のお高さんのお母さんが、その親切な好（い）いばあやであった。ばあやはカンテラに石油（クソ）をもやして針仕事をしたのだそうで、そのせいで眼くされになったと言っていた。年のころは幾つ位だったか見当がつかなかったが、とにかく皺だらけで眼をしょぼしょぼさせていたが、娘のお高さんがきれいな人だったから、ばあやもきっと若いころは器量よしだったのだろう。ばあやは「べいだいしょ」という歌を歌って踊って見せてくれた。後日、それは米大舟という米を運搬する舟の歌だと知った。歌の文句は、ばあやの訛りでは意味がとれなかったが、ゆったりした節まわしは、子供の心にも好ましく聞えたし、「黒井砂山米ならよかろ、沖の米大舟にただ積ましょ」（これも子供の私には、何のことやらさっぱり解らなかったが）テンポの早い踊りよりもいいと思った。ばあやはまた、何でも聞きたがる私に、この村へ嫁入りした時にゴロウの丸帯をしめて来て、世間の評判になった事を話してくれた。私はその自慢の帯に好奇心を抱き、ゴロウとはどんなものか根ほり葉ほり質問したので、ばあやがその布をまだ大切にしまってあるといって、或る日自分の家から持って来て見せてくれた。私は、

「なあんだ！　これあかすりのきれじゃないの」

と失望した。母がお風呂に入る時使っている布と同じだったからだ。今考えて見ると純毛で織ったもので、ばあやの若いころは日本では出来ない品で、いわゆる古渡りもの、つまり舶来品で、恐



らく西陣織よりも高価なものだったに違いない。それを垢擦だなどと馬鹿にした事を申訳なく思ったのは、女学校へ行ってからの事で、もうばあやに詫びる由もない頃であった。

さてその思い出の砂丘も今は影も形もないに違いない。尤小学校三年生の私にとっては登るのに骨の折れる高い砂山であったが、実際は大して高いものではなかったのかも知れない。

その砂丘を西に向って少し行くと、何を祀ってあるのか知らなかったが、小さな祠があって七五三縄が張ってあって、白い提灯がさがっていた。

その近くで、当時受験勉強中だったらしい代用教員の熊倉先生と私たち腕白小僧（私は女の子とは認められていなかったので腕白小僧の一員であった）の一団が、秋の荒海に向って凧揚げをした。私たちは熊倉先生の指揮で、その辺に落ちている藁縄を拾い集めて、それをつないで凧の尾にしたが、それだけでは面白くないので、私は祠の提灯を取って来て先生に奉納した。熊倉先生（その頃まだ十五、六歳の少年だったかも知れない）は喜んで、私の差し出した白い提灯を凧の尾の先に括りつけた。そして五、六人の子供たちにその凧を持って砂丘を駈けおりて行かせ、

「よし!!」

という号令と共に皆が手を放すと、先生が絲をたぐって空高く揚げるのであった。斜めの位置に立って西風をはらませた凧は、白い提灯をゆらゆらさせながら、怒涛のさかまく日本海の上空高く揚がって行く。用意した糸では足りなくなり、皆で拾い集めた縄を何本もつないでいった。

私はその凧が佐渡が島まで届くかも知れないと思って、胸をおどらせたものだ。その凧揚げで忘れられない事件があった。或る時、私たちが「デロレン」と呼んでいた、鼻たれ小僧がついて来た。強風に手のひらを痛めた熊倉先生は、唸る凧の紐をその子の腰に括り付けた。するとデロレンは凧に引きずられて、あれよ！あれよ！　という間に砂丘の下へ転落していったので、皆でわめき声をあげながら追いかけていって、波打ちぎわでようやくデロレンをつかまえたが、張りを失った凧は海中へ転落してしまった。

このデロレンというのは、村の唯一の風呂屋の子供で、お湯が沸くと、ほら貝を吹いて村中に知らせるのであったが、時折、夕方の入浴時間でもない正午頃に、ほら貝の音が響いてくる事があった。村の子供たちの説明によると「デロレンザエモンが来たんだすけ」というので、後日判明したところによると、それは浪花節語りが来たという知らせであった。太棹の三味線をかき鳴らす音色を「デロレン、デロレン」と形容したところから出た名称だったらしい。それで、いつも青っぱなを垂らし、お臍を出して皆の後ろについて歩いていたその男の子が、デロレンザエモンの来る家の息子故にデロレンと称ばれるようになったのであった。私はついにその男の子の本名は知らないでしまった。

そういえばあの頃の黒井村の家は、本名よりも、それぞれ渾名で知られていたようだ。「あぶらやの姉ちゃん」と呼ばれていた盲目の娘さんを覚えている。いつもきれいに銀杏返しに結って、きちんとした服装をして、店に座って裁縫している姿を私は子供心にも美しいと思った。盲目だなんていう事は全然気がつかなかったが、ばあやが、

「あの姉ちゃんは発明な衆で、眼が見えんでも指でさわっただけで、反物の裏表がわかるし、縞もわかりなさるんだでね」

と教えてくれたので、私はますます感心して、その家の前を通るごとに歩を止めるのであった。

あの頃の仲間で、もう一人私の尊敬していたのは南條先生のお嬢さんの、みさおさんであった。いつも背中に赤ちゃんを負ぶっていたが、勉強の事なら何でも知っていて、教えてもらった。南條先生はいつも生徒に親の手伝いをしろと言っていらしたので、私はみさおさんが小さい弟のお守りをしているのを見て、親の手伝いをしているから偉いなと思っていた。

男の子で悪戯っ児は竹田のエイちゃんと、竹内コッパだった。エイちゃんは隙さえあれば三つ編みにした私の髪を引っ張って「やい、チャンチャン坊主！」とはやし立てた。口惜しいけれど、彼は大きくて、とても足が早いので到底太刀打ちができず、常にいじめられっぱなしだった。

竹内コッパは、あんじょさんと並んでいたので、腰掛の中央といっても自分の方は広くとって白墨で線を引き、あんじょさんが

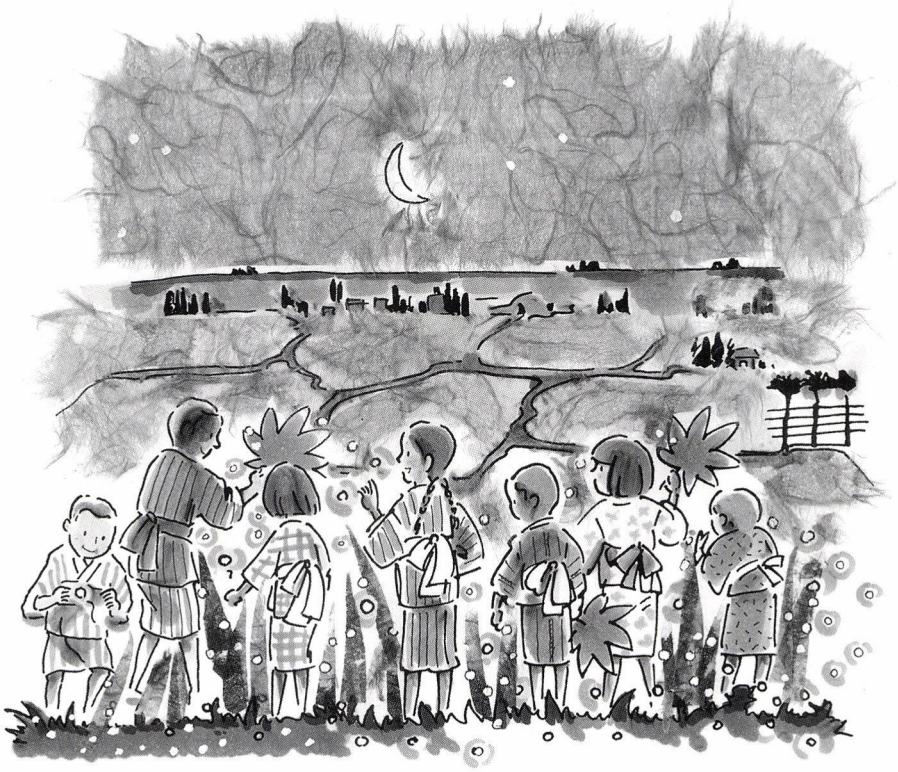
その線を越えるといじめて泣かしていた（その頃の学校は机も腰掛けも二人分ずつつながっていた）。なにしろ彼女は衣を着ているから、狭い領分でいくら小さくなっていても一寸動くと、ひらひらした袖が越境するので泣かされ通しで、ついに学校へ来なくなってしまった。色白の可愛らしい顔をしていたから、墨染めの衣の似合う美しい庵主さまになられた事と思う。

因みに竹内コッパというのは、その子の頭に銅銭大の禿があったからで、あそこでは円形の禿をコッパと称し、頭全体が禿げているのをカンパといい、髪が薄くなってカンパになりそうな様子の頭はアメているというのであった。それから、あそこで知った言葉でもう一つ覚えているのがある。薄氷の事をザイといい、冬の初の頃、私たちはザイが張ったと聞くと外へ飛び出して行って、そのザイを踏み割って楽しんだ。このザイというのは日本の古語だという事を古典の勉強をするようになってから知った。

夏の思い出で忘れられないのは、西の空を赤く染めて夕陽が落ち、男の子たちが竹竿を持ち出して、ひらひら飛び交う蝙蝠を追いまわす中を、子守りの一団に加わって、東西に一本の帯のようにのびている狭い村街道を、声を張り上げて唱歌を歌いながら往ったり来たりした楽しさがあった。そして方々の家からランプやカンテラの光が洩れてくると、それぞれの家へ帰っていくのであった。

それから、テレビで夕方天気予報の時間に下駄を足から投げとばす場面があるが、私はそれを見る度に、黒井村で夕焼け空に向って「雨か天気か空へ行って聞いて来い！」と皆で声高らかに叫んで、勢いよく足を跳ね上げて履いている下駄を高く投げとばし、それが落ちて来た時、鼻緒のある方が上を向いていればお天気、下駄が裏返しになっていれば雨と占った事をなつかしく思い出す。

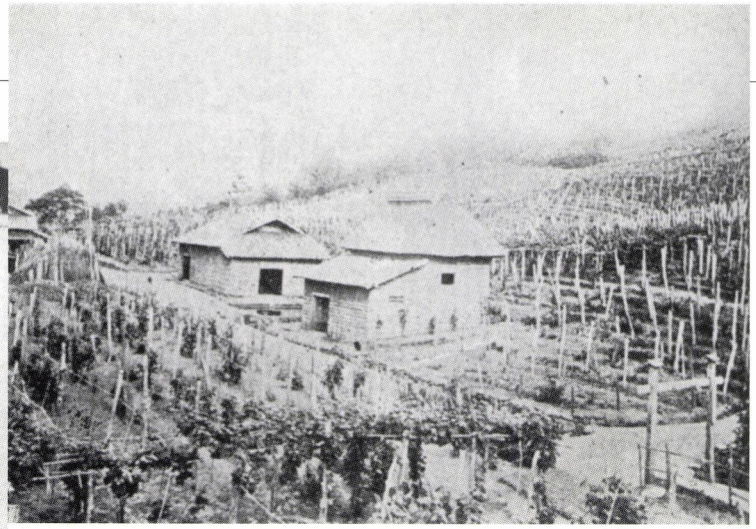
夏のもう一つの楽しみは、夕飯がすむと子供たちが一団となって田圃へ蛍狩りに行く事であった。そんな時、うちわ等持ち出すと、家人に咎められるので、八ツ手の葉を一本折り、途中で畑のねぎの青い部分を一本とっていって、田の畦に飛び交う蛍を叩き落して、そのねぎの中に入れ、それが一杯になると、まるで緑のネオン灯のようにぴかぴか光るねぎをかざして帰って来るのであった。私はその蛍を蚊帳の上に放して、夜空の星を眺めるような好い気分になって眠るのだったが、家の人たちは蛍とねぎの悪臭に辟易したらしく、間もなくこの素晴らしい蛍狩は禁止されてしまった。（つづく）



文学の旅

上越市

「越後記」の旅
ジャーナリスト杉村楚人冠（そじんかん）



岩の原葡萄園

「朝日新聞」のコラム「天声人語」の命名者、楚人冠・杉村廣太郎は、明治五年和歌山市に生まれている。

楚人冠は、十九歳で「和歌山新報」の主筆に就き、在日アメリカ公使館通訳を経て、明治三十六年、東京朝日新聞社（朝日新聞社）に入社。調査部の創設、新聞縮刷版、「アサヒグラフ」を創刊、また「新聞学」に関心を示し、情報媒体としての新聞を確立した人である。また唱歌「牧場の朝」の作詞者でもある。

号の「楚人冠」とは、公使館時代、帽子掛けを白人とは別にさせられるという差別に憤慨して『史記』「項羽本紀」の「人言『楚人沐猴而冠耳』果然」（項羽は冠をかぶった猿だという人がいるが、そのとおりだ）から採ったという。

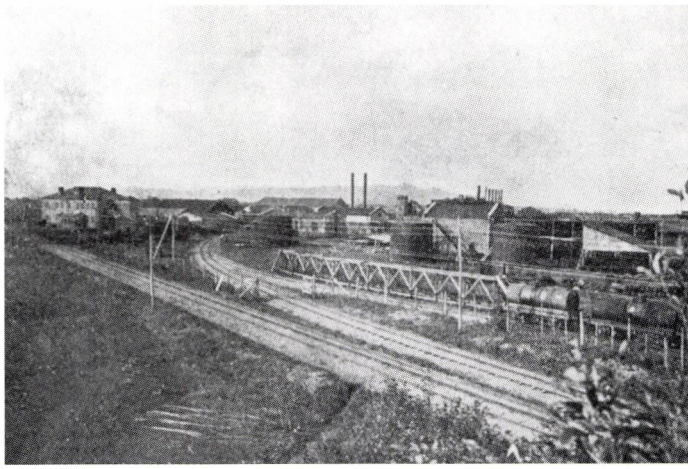
楚人冠は、明治四十四年一月から四十五日間、東京朝日新聞社特派員として「越後全国を歴遊」し、二月から五月にかけて「東京朝日」に「越後記」として連載している。

この「越後記」は同年十月、新潟の萬松堂支店から出版されているが、そのなかで歴遊のわけを二つ挙げている。一つは、越後は東京から汽車でわずか半日の距離にもかかわらず、東海や山陽に比べて世に知られていない。もう一つは、越後のなかでもお互いを知らないことが多い。これを「天下に紹介」するためであると述べている。

越後は小藩分立し、「同じ一国といいひながら、上越と下越と容れず、信濃境の地は、岩代羽前の境と、思想好尚すべて一致しない。手近い例を引くと、上（かみ）の者は口が達者で算當に暗いが、下（しも）の者は口こそ利けね、算盤に明るい。大橋佐兵衛、大倉喜八郎、日比谷平左衛門、益田孝なんどが、皆下（しも）から出たのを見て、以って知るべき也とある。フゝンといふべき也である」これなど今読んでも、楚人冠



金谷山でのスキー演習



インターナショナル製油工場

とであると言い、「子供が二三尺の薄い木片（きぎれ）に布片（きれ）の鼻緒をつけて、スキーに代へているが、スキーもこう平民的にならぬと面白くない」と述べている。また、レルヒが高田に派遣され、スキーが伝えられたのは「高田にとって儲け物」であるとも語っている。

またある日は、降雪のなか二人曳きの人力橇に乗り岩の原葡萄園に川上善兵衛を訪ね、葡萄の改良とワインにかける思いを一日聞き、高田中学では謙信文庫を見て、水戸の彰考館とともに「僕は会心の文庫を二つ見つけた」と、楚人冠は賞賛している。

最初の八日間の滞在中、直江津では「荒川口の右岸に出ると、小丘四五、雪に埋もれて列んだのがある。淋しげに烏が一羽、高い松の樹の枝の上で啼いている」と福島城跡に立ち、次に郷津に赴いて「喧（やかま）しい」築港問題から弁慶の腰掛岩の話にまでおよんでいる。

この後、中下越を探訪して戻り、高田の雪に比べ「直江津の雪はぐしゃぐしゃして、忌（いや）に水っぽい」と言いながら、黒井の製油所の見学に向かう。この製油所は、すでに日石に売却されていたが、東洋一と言われたスタンダード石油工場である。売却に当たっての、立つ鳥あとを濁さぬスタンダードの美談を紹介しながら、かつてはペンキの色も鮮やかな「西洋立ちの家」、住人のいなくなった社宅の荒廃を「アラビアンナイトの化物屋敷」のようだと嘆息している。

「越後記」は昭和十二年、日本評論社から『楚人冠全集』（全十二巻）の第三巻として刊行されている。

高橋佐兵衛
長岡出身。正しくは高橋佐平。当用日記で知られる出版社博文館の創設者。

大倉喜八郎
新発田出身。サッポロビール、大倉ホテルなど、大倉財閥の創始者。

日比谷平左衛門
三条出身。紡績業界を牽引し、鐘紡、日清紡の今日をつくる。

増田孝
佐渡出身。三井物産設立から支配人として三井財閥を形成。鈍翁と号し、近代茶道を切り開いた大茶人でもある。

でならずとも「フ、ン」と思うところが多い。右のような総論から各論、全県下多岐にわたって興味深い見聞録が展開されているが、上越での足跡を少し見ることにする。

高田へ着いて早々、レルヒ少佐からスキーに誘われる。滞在中の案内役、岡倉天心の長男で「高田新聞」の記者岡倉谷人を伴って、連隊から金谷山へ向ってスキーで行軍するのだが、谷人はスキーで「人並みらしく滑って」行き、楚人冠は慣れぬカンジキを履いて溝に足を突っ込んでは「抜けども引けども動かばこそ」と、難渋しながらようやく金谷山にたどり着いてスキー演習を見学する。堀内連隊長が、スキーを軍隊と町民との意思の疎通と融和を図る道具としているのは、大変良いこ

小木から始める佐渡の旅――。

小木航路活用編

船がたがいの想いをつなぐ

■NPO法人 木と遊ぶ研究所 渡邉恵美

直江津っ子が感じた佐渡

直江津をPRするポスターを描こう。小学生の時、こんな課題が出された。数ある中で「佐渡がみえるまち」というポスターを描いた子がいた。そのころ私は、直江津から佐渡が見えるなんて知らなかった。ずっと遠いところにある島だと思っていたのだ。それからは友達と、今日は見えた、見えなかったと言いながら海を眺めていた。もちろん毎日見えるわけではない。だからこそであろう「佐渡が見える」ということは、子ども達にとって「まち自慢」になり得るのだった。

そして五年生のとき、佐渡へ日帰りの修学旅行があった。初めて訪れる佐渡ヶ島、覚えているのは佐渡金山。薄暗い中で仕掛け人形が動き、ときどきこちらを振り向く。怖かった(今でもパワーアップして怖い!)。同じころ、家族旅行でも佐渡へ出かけた。民宿のおじちゃんが笑顔で出してくれたお刺身が特別においしかった。



それからは佐渡に行く機会はなかったが、社会に出て、佐渡を知らない人が多いことに驚いた。トキや金山のことなどを話題にしてもほとんど反応がない。沖縄本島に次ぐ二番目に大きい島だと言うと驚く。自分だって佐渡についてはたいした知識もなかったが、「佐渡を描かなければ、新潟県の地図も日本地図も完成しない」と教わった私にとって、佐渡はとても身近な存在だったということを逆に教えられた。

そして観光と半々だが、仕事で佐渡を訪れる機会が増えた。私の中の佐渡は毎回変化していった。今でもよく海を眺めては、佐渡が見えるかどうかで、勝手に観天望気を作ったりしている(根拠はないが)。そして時々思う。「佐渡の人は、上越をどのように眺めているのか」と。

「交通の不便さ」はネックではない!

平成十八年度に鼓童文化財団が行った「全国都市再生モデル調査事業」に縁あって協力し、佐渡における「体験型修学旅行」の現状

分析と提案を行った。

その調査で、上越市内全小学校に修学旅行・宿泊体験旅行の現状についてアンケートを行った。平成十七、十八年度における宿泊体験学習等の行き先は、佐渡が二八%、東京方面が六二%、その他一〇%であった。

直江津から小木までカーフェリーで二時間四十分。その昔、特急で四時間かけて東京に行っていたころ、佐渡はまだ近かった。しかし今は、新幹線を使えば二時間十分で東京に着いてしまう。佐渡より東京が近くなった。

佐渡への修学旅行について、学校や保護者からは賛否両論の声が聞かれた。自然や体験メニューの豊富さは魅力だが、〈佐渡ならでは〉の体験を求める声も多い。「交通の不便さ」は最大のネックであり、保護者や児童からは東京方面への希望が多いという事実も見えた。

平成二十年春から小木航路が減便され、「交通の不便さ」は交流にとって、より一層のマイナス要素として映っている。

しかし「船に乗る」という体験は、子どもたちには大冒険である。普段、波打ち際から遠く見る海原のど真ん中を船上から眼下に見ることができる。カモメは怖いくらいに近づいて餌をねだる。自分たちが住むまちは、どんどん遠く離れ、上越の全景を望むことができるようになる。そして振り向くと、かすかに見えていた佐渡島がゆっくり近づいてきて、「上陸」を果たすのである。これが〈佐渡ならでは〉でなくて何だろうか。





船旅は貴重な時間

修学旅行では操舵室見学なども行われているが、船をただの移動手段に使うだけではもったいない。せっかくの船旅を新幹線では味わえない、貴重な時間と体験の場にしない手はない。

私たちは、二時間四十分の船旅うち三十分間を「楽しく・おかしい・学びの時間」にしようと考え、「船上の三十分ショートプログラム」という提案を行った。

最も面白そうなプログラムは「カモメ交流」である。船が岸壁を離れると、どこからともなくカモメが集まり、餌をやるといつまでもついてくる。この「カモメにやさしい餌、人気の餌はなんだろう?」と事前に話し合い、いくつか持ち込んで実験する。そして「カモメが自然の中で食べている本当の餌は何だろうか?」「カモメはどこまでついてくるのか?」「どうやって戻るのか?」「どこに巣があるのか?」などなど、予想と実際を比べながら「カモメ」を通して自然を学ぶのである。私は奈良のシカせんべいならぬ「カモメせんべい」があるといいのに、といつも思う。

少しまじめなプログラムは「海の大地を探る」である。船の下の大地、海底はどんな形をしているのか、水深は、水の色は何色か、なぜ色が変化するのか。この質問の相手は船長であろう。ただ、これも事前学習の「予想」が重要である。一つひとつ謎解きのように、目の前の事実を確かめながら「海の不思議」を体感するのである。パネルやカードで解説を用意しておけば、なお楽しく学習できる。

ほかにも「佐渡百選のポスター掲示、小解説と豆知識」「船上ウォークラリー」「佐渡案内DVD上映」など、船旅を楽しむ工夫はいくつも考えられる。これは子ども達だけではなく大人も楽しめる。船は単なる交通手段ではない。「佐渡の玄関口にあるアミューズメントパーク!」という感覚なのだ。

佐渡への修学旅行の意義

佐渡には自然・歴史・伝統芸能・生活文化など、豊かな資源を活かした体験メニューがたくさんある。しかし、それらをただ組み合わせて詰め込むだけでは、有意義な修学旅行にはならない。どこでもできるようなことをわざわざ「佐渡まで行って」体験しても意味はない。具体的には、磯遊び・たらい舟・地引き網・イカ裂き・砂金採り・竹細工・裂き織り・陶芸・太鼓体験など、それぞれ工夫がこらされた〈佐渡ならでは〉のものがある。そこへさらに「佐渡がいい！」を加えるとしたら、〈手法〉と〈交流〉と〈想い〉である。〈手法〉とは「動機付け・意味づけ」である。例えば〈私は上越大使〉という意識を持って、〈佐渡ならでは〉と交換に、〈上越ならでは〉を広めにいく、というテーマで佐渡に出かけてみたらどうだろうか。

佐渡おけさを鑑賞したら、自分の地域の盆踊りを披露する。太鼓体験を楽しんだら、上越の太鼓や笛のお囃子も聴いてもらう。そのためには佐渡の事前学習も重要だが、自分自身の地域の事前学習が必要である。

〈交流〉とは、人とのふれあいに他ならない。「方言を使って、そば打ちを指導してくれるので楽しい」という人気のスポットもある。各地域で行われている「ふれあいガイド」は、子ども同士の交流を図ることができる。「修学旅行で泊まった小学生が大人になって、こんどは自分の子どもを連れてきた！」と語る民宿のおじさんもいる。

しかし、もう一度くり返すが、このように手法や交流の仕掛け作りがしっかりできれば、やはり「佐渡でなくても、東京でもいいじゃないか」ということになる。

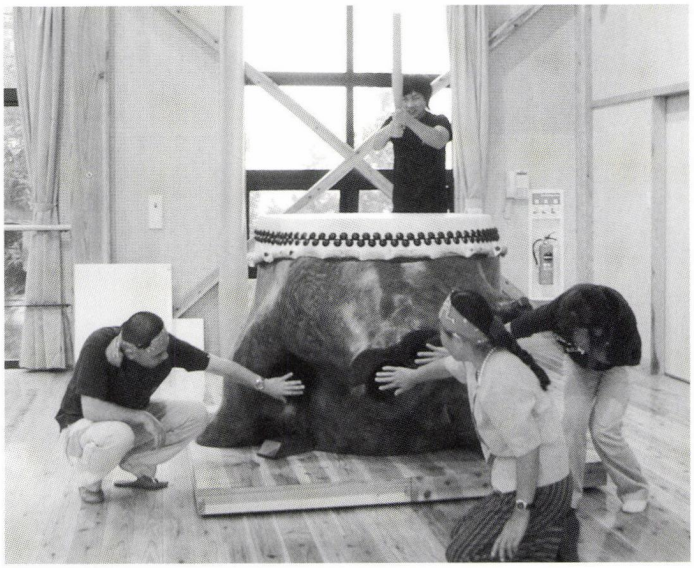
では、何が真の〈佐渡ならでは〉なのか。それは〈想い〉であろう。

上越と佐渡は近くて遠い島である。先に述べたように、お互いに見える日と見えない日がある。そこにある〈想い〉を共有できる間柄だということである。

佐渡自慢、上越自慢を競うのではなく、それを「共有」し深め合う関係作りができる間柄だと思う。これこそが上越の子ども達が佐渡へ行く意義であると思う。

その効果を今すぐ期待はできないが、修学旅行だけではなく、数多くの体験・経験が彼らを育て、上越の子ども達が、あの時に聞いた「佐渡自慢」が、大人になって同県人としての「新潟自慢」に変化する。「故郷を語れる大人」はこうして育っていくのではないだろうか。





太鼓体験

裂き織り体験



大人になってからの佐渡

小学校では、だいたい六年生の六月に佐渡を訪れるが、この時期では、たとえば「佐渡金山」の本当の意味は理解できないそうだ。佐渡金山の背景にある江戸時代の歴史をこの時期にはまだ学んでいないからだ。宿根木も風情ある地域だが、小学生にはピンとこない。佐渡は能をはじめとした伝統芸能の宝庫だが、これも小学生には難しい。

しかし、それでいいのである。すべてを分かる必要はない。分かりやすい解説やパンフレットなどは不可欠であるが、修学旅行すべてがギチギチである必要はない。楽しむ時には思いきり羽をのばし、学ぶべき時には真剣に学び、その中に背骨を貫くテーマを「こっそり」植え付けておけばいいのである。

それがしっかり根付いていると、大人になってからの佐渡は奥深い。

私は、鬼太鼓や能を通じて「芸能の島」という言葉の意味を体感しつつある。それを支える自然や人々の生活に興味を持つと、トキも金山もまた新たな視点から眺めることができ、新たな発見がある。

また、毎年夏に行われるアースセレブレーションには、世界各国から多くの人が訪れ、静かな小木のまちが一変する。私もその中に加わる。私の中で変化する佐渡を感じながら、最初の問いに戻る。

――佐渡の人は、上越をどのように眺めているのか――

と。





アースセレブレーション

上　鼓童村の公開　芸能と森の結びつきを考える。木と遊ぶ研究所が佐渡へ渡って、鼓童の森を案内する。

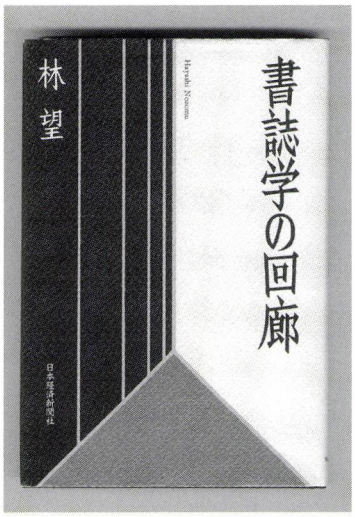
中　ハーバーマーケットでの行進

下　アースセレブレーションが終わり、直江津港へ帰る人たちを「送り太鼓」で見送る鼓童のメンバー。



相川善知鳥（うとう）祭り

■読書びと



書誌学の回廊

林　望著

日本経済新聞社
一五五三円（本体）

今を時めくリンボー先生・林望（はやしのぞむ）が一九九一年『イギリスはおいしい』（平凡社）を引っさげて登場したときの新鮮さといったらなかった。それまでも、たとえば伊丹十三がいて、料理のみならず家事全般についての戦闘的な、そしてまことに繊細なエッセイを楽しむことができたし、所を変えればそこには池波正太郎がいた。

狷介さを補って林のイギリス体験に共感を覚えたのは、誰もがみな貧しかった昭和の三十年代に繰り返される日常の暮らしのなかで少年期をすごした、その同時代体験が為せるものだったと今にしておもう。本物と偽善の見分け方を、私たちを取巻く人や自然から教えてもらった幸せな時の移ろい。昨年末に刊行された『ついこの間あった昔』（弘文堂）というフォトエッセイを読めば、林の元標が今でも過ぎた昭和へのオマージュであることがわかる。

そこからどこへ往くのか、毀誉褒貶多しこの男の真面目が問われているのだ。

林望は一九四九年東京墨田に生まれ、戸山高校を経て慶應義塾大学国文学科を卒業する。

硬派の東大総長だった林健太郎を伯父に、〈情報化社会〉という言葉を生んだ林雄二郎を父に、という出自を得て慶應の付属古典文献学研究所である〈斯道文庫（しどうぶんこ）〉で、〈書誌学〉という日の当たらない広遠な学問に一生をかけるべく、阿部隆一教授の容赦のない演習をうけた。さまざまな挫折の後に多くの僥倖を得て英国に留学し、一九八四年から八七年までケンブリッジ、オックスフォードの両大学で日本書誌学の研究員、客員教授として滞在、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』を完成して国際交流奨励賞を受賞した。帰国後イギリスを舞台の著作で日本エッセイスト・クラブ賞を得たのを皮切りに、食や旅は勿論、能楽から自動車評論まであらゆるジャンルに文を綴り、専業文筆家に転身する。

書誌学者としての林の著作は、専門的な目録を除くと管見では僅か二冊である。九五年に上梓され、国文学から文献同定の世界に進み修行する間の愉しみと苦しみ、師と本との巡りあいを愛惜こめて綴る書物随想『書藪巡歴』（新潮社）、そして同じ年に、プロとしてその世界を一般読者に紐解いた『書誌学の回廊』は刊行された。

「学問としての書誌学」という章から説き起こし、手で書き写した「写本」と版木や古活字による印刷「刊本」の歴史、本阿弥光悦の工房から送りだされた伊勢物語ほかの「嵯峨本」と呼ばれる美しい古版本の一群、などの話を簡潔にそして決してレベルを落とさず、多くの図版と専門の用語を駆使しての語り口で手渡す。

「書誌学は、地味な上にも地味な、限りなく辛気くさい学問である」と林が述懐するように、一冊の古書が何時どんな製作過程を経て作られ、他の同種のものとどこがどう違うかを研究し確定させる、という息の長い〈仕事〉の醍醐味。

「書誌学が片手間でできるような生やさしいものではないことに気づいた」若き日の林は、脇目も振らず努力する日々を選んだ。長岡出身の反町茂雄（そりまちしげお）の名著『一古書肆の思い出』（平凡社）、そこで描かれる国宝・重文級古典籍発掘の世界の裏面にこの静謐の時が流れていることを思う。丸谷才一をして「藝があつて品がある」と言わしめた林の文筆活動の下地はそこで育まれた。

しかし同じく厨（くりや）の家事を巡っても、小住宅設計の名手宮脇檀（みやわきまゆみ）が六十二歳で此の世に遺した『父たちよ家へ帰れ』（新潮社）の、暮らしや子育てをシャイに無類の優しさで語るエッセイを私はより大切にしたい。昨今の林が忘れている真にリリカルなものが其処には在る。『書誌学の回廊』が、本業との別れの為の中仕切りだったのではと思うにつけ、タレント張りの活動を選んでまでの林望の思いの丈を見据えたい。（秦）

この春 カメラの眼





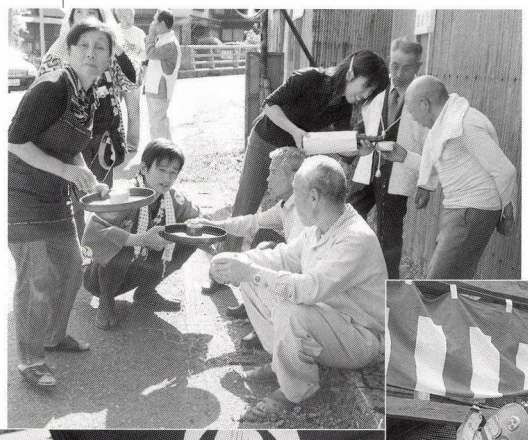


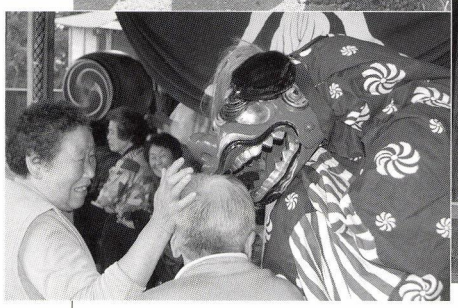
まちを“いきいき”と

直江津にコミュニティーバスを走らせる市民の会設立事務局長　磯田さんの言葉

まちの活性化策の一つとして、三八市に合わせて5月3日限定で循環バスを走らせた。バス利用者に子連れの若い人たちが多く、市はいつもの倍以上の人で賑わいだった。

のびやかな人たち









気比神社春祭

5月3・4日中ノ俣

建物さんぽ　その十

水から電気をつくって八十年

初夏の陽射しがまぶしい五月の連休の合間、かねて依頼していた矢代川水系にある日曹二本木工場の水力発電所見学の予定を確認したとき、「これから除雪に行くので、様子を見てきます」という返事。暖冬といわれたこの冬でも、中郷から山沿いの一帯は平年通りの降雪だったそうです。見学当日は、さすがに長靴不要でしたが、それでも道端にはしっかりと雪が残っていました。

下流から第一発電所（昭和二年完成）、第二発電所（昭和四年完成）と遡り、一番上流の第三発電所（昭和十三年完成）では、残雪あざやかな妙高山と雲の向こうの火打山を源とする二つの雪解け水が急斜面を伝い、その合流点に建てられた発電所に向かって駆け下りて来る仕組みがよくわかります。建物はいずれも昭和初期の鉄筋コンクリート造、同じ形態で川沿いの僅かな平坦地にひっそりと佇んでいます。下流の第二、第一発電所では、川の本流と隧道を経由して水を順番に無駄なく利用しています。落差の位置エネルギー、慣性の法則、水車回転運動とタービン力軸の変換など、物理の基本用語が脳裏を掠めていくのですが、何といっても〈雨の一滴、血の一滴〉という水力発電の本質を語る言葉を実感しました。

半年以上も豪雪に埋もれる谷底で短い夏場の工事。鉄道が資材運搬を支え、そこからは重機や索道を駆使、最後は人力でセメント袋も鉄筋も担いで山道を登った。今は険しいながらも車で行けるが、それでも冬季間の点検には雪上車とスノーモービルで接近、最後はスキーで発電所までたどり着く。機械電気技術者とはいえ、特殊車輌運転免許必須、スキーも巧みでなければ勤まりません。社有道路周辺の草刈りも仕事のひとつ。現地の案内をお願いした島田さん（㈱日曹建設）も土木・建設・林業・特殊車輌運転・安全管理のベテランです。

第二発電所は矢代川に架けた吊り橋の向こう岸に建てられています。赤錆色のトタン屋根。モルタル塗りの外壁はベージュ色の塗装。雪にすっぽりと埋もれる第三発電所はモルタルの灰色もそのまま。新緑の浅緑と杉木立の濃緑色、青空と白雲の中にメルヘンに登場しそうな小さい発電所。あの中で電気を作っているのは、一所懸命に働く小人達の仕業といわれても納得してしまいます。

発電所周辺には熊の親子もたびたび現れるし、カモシカの姿を見かけることも稀ではないとのこと。動物も小人達も必ずどこかに隠れているのでは？

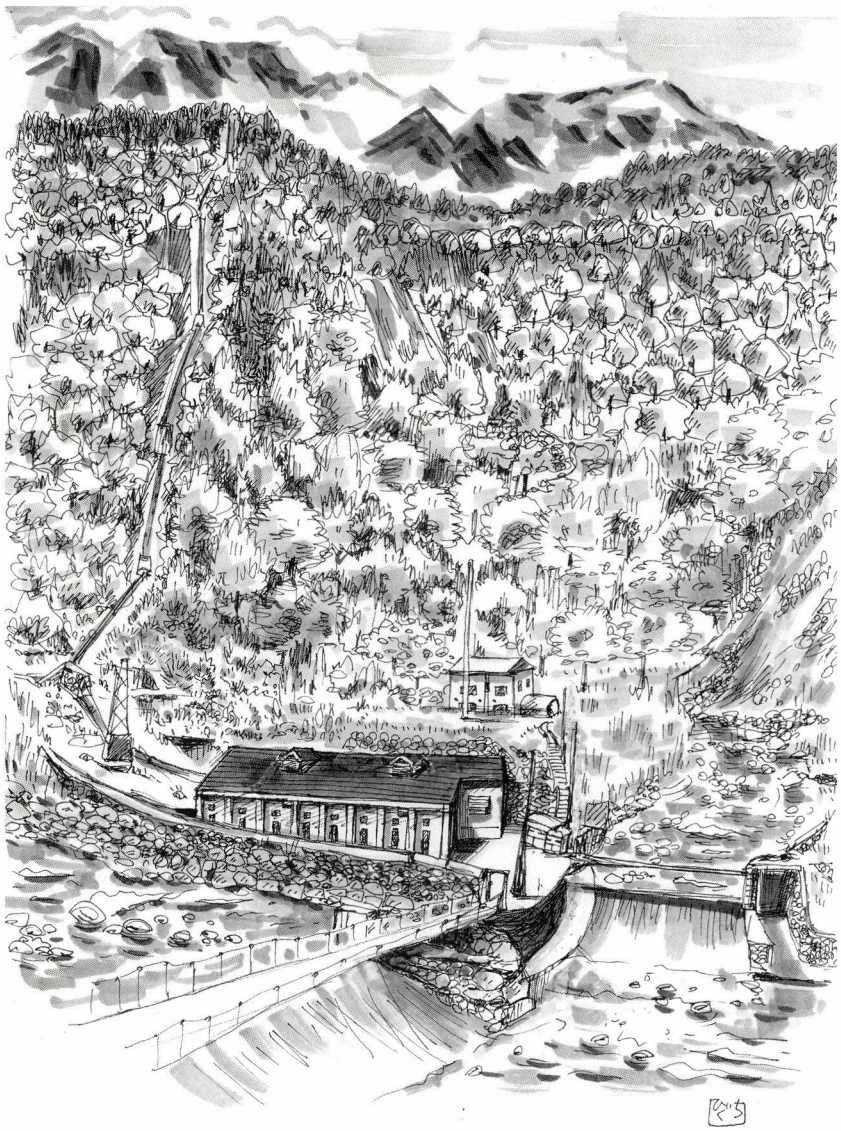
今は監視カメラが見たものを光ファイバーで工場へ送信しているそうですが、隣接する点検管理の事務所は、その昔、当直用宿舎。二階にも冬用のドアが設けられて、雪を掘り出して入ったのです。しばしばここで冬籠りして、小人達の働きぶりを監督していたのかしら？



妙高山系の豊かな雪解け水と急峻な河川は、上越地域の電力開発の歴史に水力発電の足跡を刻んできました。重化学工業の日曹は、電気分解プロセスのために水と電気が命綱。発電認可出力は三発電所合わせても8、490kWですが、自然エネルギーの電力を供給し続けて八十年余。この地を選んだ理由がうなずけるわけです。現在、県内の企業で自家水力発電所を稼動させているのは、日曹と青海電化の二社ということですから、上越地域は小規模水力発電の中心地です。豪雪地だからこそ山地そのものが天然ダムとなり、土木構造ダム不要の水路式発電が可能となるのでしょう。

JR二本木駅付近を歩いたとき、木造駅舎の頑固一徹の風貌とスイッチバック、錯綜する鉄路に居並ぶタンク車輌、煤けた化学工場の煙突群を見て不思議の国の入口に立ち止まった気がしました。大正期から重化学工業の近代化に邁進した古参企業の主力工場、会社のマークは雪輪に雪兎。

山を下りて一般道路に戻れば、田植の終わった水田が広がる頸城平野の南端。電気を生み終えた雪解け水は稲作の命にも…。雪とともに生き続けてきた長い歴史の一コマに出会った一日でした。



発電所は平成20年4月、日本曹達㈱から上越エネルギーサービス㈱に移管
信越本線　明治19年直江津・関山間開通、26年全通
関川水系の発電　明治40年5月、蔵々発電所から始めて送電され、以降、板倉発電所まで12の発電所が造られた
参考　直江の津（2007年春号）國友末蔵　特集

文　せきゆうこ
画　ひぐちきみよ

上越信用金庫　上越産業振興研究所レポート

「使い勝手のよいまちづくり」Ⅱ

えちぜん鉄道の再生に見るコミュニティー鉄道のあり方

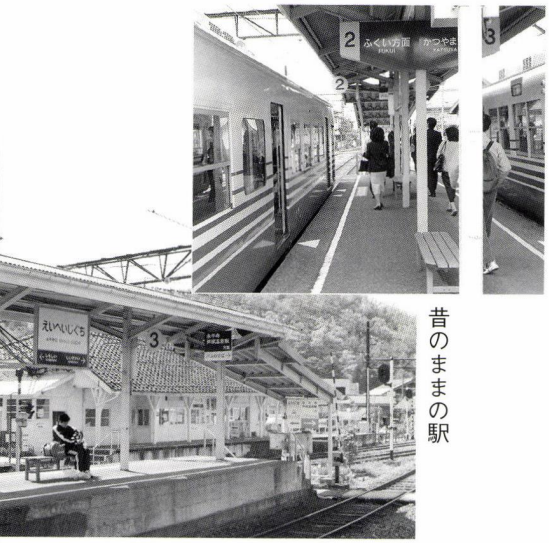
―「鉄道のまち直江津」を取り戻すために―

研究員　佐藤和夫

京福電鉄からえちぜん鉄道へ

えちぜん鉄道は、福井市と勝山市を結ぶ越前本線（現・勝山永平寺線）と、福井口駅で別れ三国港へ向う三国芦原線の二路線を京福電鉄から引き継いだ鉄道のことである。

京福電鉄は地域の生活路線であるとともに、東尋坊や永平寺、勝山への鉄道であったが、乗客の減少で廃止も考えられていた。しかし、地域の要請に応えて運行を続けていた。そのなかで平成十二年十二月、翌年六月、わずか半年間で二度にわたり死傷者をだす正面衝突事故を起こし、国交省による事業改善命令が出された。会社は巨額の出費を伴う事業改善は無理と判断して廃線を選択し、列車が走らない空白の二年間を経て、第三セクターのえちぜん鉄道として再生したのである。



昔のままの駅

「マイレール」の発見

車で勝山から福井へ行くには国道四一六号線がある。地図を見ても想像できるが、九頭竜川の渓谷に沿って走るため、カーブや起伏が多いうえに道幅が狭い。

京福電鉄の廃止によって、国道四一六号線に代行バスが走ることになった。しかし、バスでは通勤通学の人たち全てを収容できるわけではない。また定時運行も保証されない。足を奪われた人たちはマイカーに切り替え、通勤通学の送迎車と代行バスで狭い国道は大渋滞をきたした。沿線では進学先の変更や通院を断念させ、冬季間は陸の孤島と化す事態も起きた。沿線に五つも高校をもつ三国芦原線も同様であったという。

廃線による道路の混乱は、以前から鉄道を利用していないマイカー通勤者をも巻き込む社会問題となった。しかしこの事実は、図らずも移動手段を持たない高齢者や高校生の通学の確保、大量定時運行の確保という鉄道の持つ社会基盤としての重要性を発見させ、後のマイレール意識への力となった。

「予期せぬ実証実験」は、沿線市町村に鉄道復活の市民運動を起こし、賛否両論、紆余曲折はあったものの七万人におよぶ署名運動が実って、平成十四年九月、沿線市町村と企業、一般市民の出資による第三セクター「えちぜん鉄道株式会社」が発足、翌年七月、運行が再開された。



セルフサービスの100円コーヒー

地域サービス

通称「えち鉄」に乗って分かることは、地域へのサービス業としての意識である。一番よく分かるのは、「アテンダント」と書かれたボードが側面に下げられた列車に乗ると、おしゃれなユニホームを着た女性が同乗していることである。彼女たちは「アテンダント」と呼ばれ、運行に関わる業務、ドアの開閉や列車の安全確認などは行わないが、乗客へのサービスを担当する。えち鉄は列車とホームの間隔が開いていたり、駅によってドアの開く場所が違う。駅舎は昔のままのであり、まさにバリアーだらけである。それらの案内・介助、無人駅からの乗客の乗車券の販売、そして気持ちのいい笑顔を絶やさず、ゆっくり車内を歩きながら乗客に気を配り、観光客にはさりげなく案内やガイドマップを渡してくれる。彼女たちの活動を記録した本で知ったことだが、社内に持ち込む小型のキャリーバックには救急道具なども入っているという。切符やつり銭の入ったショルダーバッグには、アテンダントの格好をしたキティちゃんのストラップが車内販売用に下げられている。

このようなサービスばかりではない。一日フリー切符プラス映画割引、公共温泉割引、「えち鉄サポーターズクラブ」会員への各種割引制度、自動券売機ではなく窓口でキップを販売することで、フリーキップ・往復キップの販促、乗降客の動向を把握している。

また、駐車場や駐輪場の整備によるパーク&ライド化、無料レンタサイクル、学生専用の学期間レンタサイクル、土・日・祝日の自転車持込など、快適に鉄道が利用できるサービスが提供されている。

このような営業努力が実って、京福電鉄時代の乗客予測は、毎年二パーセント減で平成十九年度は二百五十万人と予測されたが、三百万人を突破している。その六割が通勤通学客である。ことに学区制の廃止や昨年来のガソリンの高騰なども乗客増につながっているようである。この乗客増加によって、三国芦原線と福井鉄道の福武線と相互乗り入れも計画されているようだ。





笑顔を絶やさないアテンダント





土日休日は自転車持ち込み可

えちぜん鉄道株式会社
資本金　5億3700万円
沿線市町村5
　7500株　69・8%
一般株主42　3240株
社員数　93名
営業キロ　53㎞

直江津を基点とするコミュニティー鉄道

本誌27号でレポートした富山ポートラムは、一部を路面電車（トラム）として新設し、乗り入れる在来線部分の駅のホームを低床化して、バリアフリーとワンマン化でサービスを充実させている。一方えち鉄はバリアーを逆手に取った形で、「アテンダント」に代表される〈マンパワー〉で様々なサービスを提供している。

上越では北陸新幹線開業に向けて、並行在来線の今後が注目されている。コンパクトシティーを標榜する上越市の「まちの形」の基盤として「鉄道」を見直し、信越・北陸線、ほくほく線の連携や駅の増設、列車の本数増、サービスのあり方など、今から実証実験を重ねていく必要があろう。それには「えち鉄」の考え方が大いに参考になるはずである。

また、新潟県鉄道発祥の地であり、上越の鉄道の要である「直江津駅」が、新幹線の乗降客を各方面に振り分け、コミニュティー鉄道の格となるヒントを「えち鉄」が持っている。

参考資料　「RRR」2007・10　㈶研友社
『ローカル線ガールズ』メディアファクトリー

アルバムの一枚

最古の映画館「日活」





柱のひょうたん形の足は今も変らず存在する

高田の映画は、劇場だった高田座を大正五年に改装して「日活世界館」（本町六）、翌年に高盛館が電気館（本町二）と名乗ったのが始まりで、両館ともにピアノを入れ、活動弁士の語りの伴奏をしたといわれています。

本格的なトーキーは、昭和五年に世界館で上映した水谷八重子主演「大尉の娘」、翌年、電気館の田中絹代主演「マダムと女房」が初で、昭和十五年ころには呼び方が、活動写真から映画に変わっていきました。

系列や経営者、館名が替わりながらも昭和四十年代までは四館もありましたが、数年前、数々の洋画を楽しませてくれた中劇がシネマコンプレックスとして郊外に移転、まち内に残るのは、日活だけになりました。

日活は成人映画専門で、なかなか入る機会もありませんでしたが、この建物の魅力を発見した人たちで、落語の会なども行われるようになりました。

建物は明治時代に建てられたもので、営業している最古の映画館建築として雑誌に紹介されるなど、全国的にも注目され始めています。

写真は大正十二～十三年に撮影され、看板から、

恋と闘ふ女
鬼小島弥太郎
最期の一挺身

と読める映画が掛かっていたことが分かります。どんな映画だったのでしょうか。

参考・高田市史

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

■編集室から■

大野氏のアグリフューチャー・じょうえつへ写真撮影にうかがったところ、工場の外観大きさに比べて、設備の簡単なことに驚いた。そして、おこげのような香ばしい匂いが漂っている。そういえば、有料化で使用されることになったゴミ袋も、なんとなく香ばしい匂いがする。

たかがゴミ袋かもしれないが、上越から全国へ発信する、循環型環境ビジネスが始まっている。

「この人に学べ」は誌面の都合で休載しました。

第8巻3号　9月1日　発行予定

年間定期購読（4冊1920円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

季刊「直江の津」夏号
第八巻二号　通巻三十号
発行日／平成二十年六月一日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
上越信栄社内
☎〇二五(五四五)〇二〇二
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／(有)北越出版
責任者　佐藤和夫

内容・投稿などの問合せ先
北越出版
上越市国府三－九－五
〒九四二－〇〇八二
TEL〇二五(五四三)九七一五
FAX〇二五(五四三)二〇二五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊

直江の津

発行／平成二十年六月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／(有)北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／(株)桐朋・木南康子

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)